

第679回

九州朝日放送番組審議会議事録

—— 2026年1月度 ——

◇ 議題

<テレビ番組>

「福岡マラソン2025」

放送日時：2025年11月9日(日)正午～

◇ その他

2026年1月26日(月)開催

九州朝日放送株式会社

第679回 番組審議会議事録

1. 開催年月日 2026年1月26日(月) 15時55分～17時25分

2. 開催場所 九州朝日放送 本社7階A会議室

3. 委員の出席

委員総数 8名

出席委員数 8名

委員長	山根 久資
副委員長	森 慎二
委員	副田 智幸
委員	サーズ 恵美子
委員	小柳 美佳
委員	泗水 康信
委員	林田 真心子
委員	松瀬 萌々香

欠席委員数 0名

放送事業者側出席者名

代表取締役社長	森 君夫
取締役 報道制作局長	大迫 順平
執行役員 総合編成局長	柴田 高宏
広報室長	原 由美子
報道制作局 コンテンツ戦略部長	山田 利宣
報道制作局 コンテンツ戦略部 (番組プロデューサー)	北島 純
総合編成局次長 兼 番組審議会事務局長	武藤 礼治
番組審議会事務局 (総合編成局)	松永 俊郎

4. 議題

- (1) テレビ番組「福岡マラソン2025」
放送日時：2025年11月9日(日)正午～
- (2) 2026年1月・2月 ラジオ・テレビ番組編成状況の報告
- (3) 2025年11月・12月 視聴者・聴取者応答状況の報告
- (4) その他

5. 議事の概要

委員の意見（概要）

委員からは、

- 年齢や立場などの境遇が異なる市民ランナーが紹介されることで、視聴者がいずれかのランナーの話題に共感できる構成になっていた。「自分もやってみたい」と思うことができた。
- 「私が踏み出す一歩」というテーマ設定が番組の軸になっていた。単なる市民マラソンの中継を超えたランナーそれぞれのドラマが表現されており、心に刺さった。
- 数名のランナーをピックアップしてドキュメント仕立てになっていたのでも、飽きずに見ることができた。実際にランナーが走る場面も紹介されており、継続性があり面白かった。
- 放送するタイミングが抜群に良かった。スタート地点、ランナーが走る様子、スタジオ部分と、当日の流れを刺激的に感じることができた。ドローンも効果的に活用されていた。
- それぞれに「私が踏み出す一歩」の“理由”があることを知り、見ている側が勇気をもらった。特に、母娘ランナーの方や車いす競技のランナーの方のエピソードに感動した。
- 福岡マラソンで車いす競技が行われていることを知ることができて良かった。車いす競技のランナーの方の「目標ができた」というコメントは胸に響いた。
- ランナーだけでなく、応援する家族や大会をサポートする企業も紹介することで、みんなで大会が作り上げられている様子が伝わった。バランスのよい構成で大会の魅力が伝わった。
- ファンランに参加した新谷あやかさんがスタジオ出演し参加者視点で話したことで、大会の雰囲気も伝わった。ゴールしたランナーの達成感溢れる様子がとても楽しそうだった。
- 2000年代以降のブームで全国へ広まった市民マラソンだが現在は曲がり角にあるとも聞かすが、本作を通じて、このようなイベントはぜひとも存続させるべきだと感じた。

などの評価を頂きました。

一方、気になる点や望むこととして、

- 事前にインタビューしたランナーのうち、実際に走る様子が紹介された方もいれば、紹介されない方もいたが、全員の走っている様子が見たかった。完走後のコメントも聞きたかった。
- 市民ランナーが走る様子はいまいち画にならない。中継するのなら、疲労で歩くランナーが増える後半より、元気に走っている序盤の様子を伝えた方がよかったのではないかと。
- 実際にランナーが走っている場面が少なかった。順位や記録も含めて、もう少し大会そのものを伝えてほしかった。
- 天神の繁華街から海沿いなどの自然へと風景が移ろうのも福岡マラソンの魅力。もう少しどのようなコースなのかを紹介してほしかった。

- ランナーの思いを深く知ることができる事前取材の部分に比べ、生放送のインタビューが軽く感じた。事前取材の部分を増やした方が、視聴者の思い入れが強くなるのではないか。
- オープニングの女性が典型的な主婦像として演出されていることに驚いた。「どんな人でも挑戦できる」ことを表現したのだろうが、バイアスどおりの演出は残念に感じた。
- 母娘ランナーの話題はもう少しドラマチックな展開を想像したが、けがをきっかけに走りはじめた母娘の日常を描く内容だった。とすれば、少し演出が過ぎるのではないかと感じた。
- 車いす競技のランナーの方の日常を映す場面は、背後からのアングルが多い印象を受けた。2パートに分けられた意図も分からなかった。
- ラジオ風で親近感があったものの、スタジオの MC とゲストが向かい合って座るねらいが分からなかった。出演者がカメラに視線を合わせるのに少し苦労しているようにも見えた。
などの批評や提言を頂きました。

これらに対して、制作担当者からは、

- 本作は、マラソンに挑むランナーの気持ちに迫ることを目指した。様々な境遇のランナーを見て、視聴者に「頑張ってみよう」という気持ちになってほしいと思い制作にあたった。
- 車いす競技のランナーの方は運営事務局に問い合わせでご紹介いただいた。(フルマラソンだけでなく) 車いす競技も取り上げたいとの趣旨に理解を得て情報提供いただいた。
- 「紹介した全員の走る様子が見たかった」というご指摘について、全員を紹介すると尺が不足するが、アプリを活用してランナーの現在地を紹介する手法もあったかもしれない。
- 「市民ランナーは画にならない」というご指摘はその通りだと思うので、ボランティアや沿道で応援する人たちにもフォーカスを当てた。
- 「ランナーが走る場面が少ない」というご意見について、市民マラソンに関心がない視聴者はなかなか感情移入ができないと思い、今回はランナーが走る背景(理由)に焦点を当てた。
- トップでゴールした選手の記録は去年まで紹介していたが、紹介するとそのランナーのインタビューなども必要になるため割愛した。
- 例年、コース紹介はしていたが、今回はドキュメントタッチの VTR に尺を割いた。どうすれば一般の視聴者にもっと感情移入して番組を見てもらえるか試行錯誤を重ねている。
- オープニングの演出がステレオタイプになったことは反省点。誰にでも楽しんで見てもらいたいという思惑だったが、もっと細部にまで気を配る必要があった。
- 母娘ランナーの話題はテレビ的な演出が過ぎたという印象は否めないが、ドラマ性はなくとも普通のランナーの「愛」を描くものとしてよいのではないかと考えた。
- 車いす競技のランナーの方の日常は似たカットばかりになってしまった。CM 前の VTR が長くなり視聴者に違和感を抱かせた。
- スタジオ演出は従来の流れを踏襲したが、演出しきれなかった部分なので再考したい。
- KBC では一流選手が出場する「福岡国際マラソン」も中継しているが、「福岡マラソン」との違いを考え、競技性よりも「人モノ」としてどう捉えるかに重きを置いた。
- アマチュアスポーツは大事なコンテンツだと認識している。高校野球や高校バスケットを中心に視聴者に関心を促し、地域を盛り上げる要素として今後もしっかり取り組みたい。
などの説明をしました。